

大学生が捉える運動部活動の理想の指導者像の因子構造と勝利観との関連

田口直樹¹⁾, 井上一彦²⁾

Factor Structure of University Students' Perceptions of the Ideal Coach in
School-Based Extracurricular Sports and Its Association with Attitudes Toward Winning

Naoki TAGUCHI¹⁾, Kazuhiko INOUE²⁾

Abstract

The purpose of this study was to clarify the factor structure of university students' perceptions of the ideal coach in school-based extracurricular sports and to examine its association with attitudes toward winning. A web-based questionnaire survey was conducted with 555 university students. Exploratory factor analysis using the maximum likelihood method with Promax rotation, followed by confirmatory factor analysis to examine structural validity, was performed on 50 items assessing perceptions of the ideal coach. The results revealed a five-factor structure consisting of Human Trustworthiness, Discipline and Control Orientation, Educational Role, Team Building, and Coaching Expertise. Furthermore, a one-way Welch's ANOVA was conducted to examine the association with attitudes toward winning. Significant differences were found for Discipline and Control Orientation, Team Building, and Educational Role, with higher scores on Discipline and Control Orientation among students with stronger attitudes toward winning. In contrast, no significant differences were observed for Human Trustworthiness or Coaching Expertise. These findings suggest that university students' perceptions of the ideal coach have a multidimensional structure, and that some dimensions are associated with attitudes toward winning.

Key words : Ideal coach, Attitudes toward winning, Factor analysis

キーワード : 理想の指導者, 勝利観, 因子分析

1) 仙台大学 体育学部

〒989-1693 宮城県柴田郡柴田町船岡南 2-2-18

2) 岩手県立大学 高等教育推進センター

〒020-0693 岩手県滝沢市菓子 152-52

1. 緒言

学校部活動は、学習指導要領において「学校教育の一環」と位置づけられ、生徒の自主的・自発的な参加を前提とする教育活動である（文部科学省，2017）。競技技能の向上のみならず、責任感や協調性、連帯感の涵養など、生徒の人間的成長に資する場として重要な役割を担ってきた。他方で、部活動は学校教育の一環として位置づけられつつも、その教育的意義や国が関与しうる内容が必ずしも明確ではなく、教育課程との関係や競技成績との接続をめぐって制度的な曖昧さを抱えてきたことが指摘されている（神谷，2015）。

2013年の体罰事案を契機として、学校部活動における暴力根絶に向けた制度的対応が進められ（文部科学省，2013）、その後「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」が策定され、適切な休養日の設定や暴力の根絶が明確化された（文部科学省，2018）。さらに、日本スポーツ協会は「スポーツ指導者のための倫理ガイドライン」においてプレーヤーズセンタードの理念を掲げ、相互尊重に基づく指導の重要性を示している（日本スポーツ協会，2022）。このように、制度的・倫理的枠組みにおいて指導者に求められる価値基盤は段階的に明確化されつつある。近年では、「部活動改革及び地域クラブ活動の推進等に関する総合的なガイドライン」（文部科学省，2025）において、学校部活動の地域移行や持続可能な指導体制の構築が示され、指導者像の再定義が求められている。

指導者像に関する実証研究も一定の蓄積がある。高校野球を対象とした研究では、監督のコンピテンシーとして多面的構造が抽出され（高松ほか，2015）、それが選手の内発的動機づけに正の影響を及ぼすことが示されている（高松ほか，2016）。女子ソフトボール監督を対象とした研究では、指導者側の視点からコンピテンシー構造が検討されている（長澤，2017）。一方で、高校生を対象とした研究では、選手側の認知に基づく理想の指導者像や監督コンピテンシー構造が検討されている（直井ほか，2018；平野ほか，2023）。さらに、大学生アスリートを対象とした研究では、変革型リーダーシップの観点から理想像が検討されているほか（新美ほか，2023）、優れたコーチに求める特徴についての検討も行われている（山田ほか，2022）。しかしながら、既存研究は特定競技や特定集団に限定されることが多く、競技横断的に測定し、理想の指導者像を統一的な構造として実証的に検討した研究は十分とはいえない。これらの研究は、指導者に求められる資質や行動やリーダーシップ特性を明らかにする上で重要な知見を提供しているが、個別の理論枠組みに依拠した検討が中心であり、学習者が抱く理想の指導者像を包括的な構造として捉える試みは依然として限定的である。すなわち、既存研究は指導者の望ましい行動や能力を個別的に明らかにしてきたものの、それらが学習者の中でどのような構造として統合されているかについては明らかにされていない。したがって、個別の能力や行動の集合としてではなく、理想像としてどのように体系化されているかを明らかにする必要がある。

また、部活動を経験してきた大学生は教育的側面と競技的側面の双方を体験的に理解していると考えられるが、その理想の指導者像を多面的に測定し、内部構造を明らかにした研究は限定的である。さらに、理想の指導者像は単なる能力評価にとどまらず、「どのように勝利を追求すべきか」という価値的判断を内包している可能性がある。すなわち、競技専門性や統率力といった機能的側面と、人間的信頼性や教育的配慮といった規範的側面が併存し、それらが相互に関連しながら一つの理想像を構成している可能性がある。この構造を明らかにすることは、教育活動としての側面と競技成果の追求という二重性を有する部活動の特質を構造的に理解する上で理論的意義を有するとともに（青柳ほか，2019）、部活動改革が進む現代において実践的意義を持つ。すなわち、本研究における理想の指導者像は、コンピテンシーやリーダーシップといった既存概念を個別的に捉えるのではなく、それらが学習者の認知の中でどのように統合されているかを示す包括的な構造として位置づけられる。

以上を踏まえ、本研究では、大学生が捉える運動部活動指導者の理想像の因子構造を実証的に明らかにし、その構造と勝利観との関連を分析することを目的とした。

2. 方法

2.1 対象および調査方法

本研究は、体育系大学生を対象とした横断的 Web 質問紙調査である。調査は Google フォームを用いた Web アンケート形式で実施した。564 名に依頼し、555 名から有効回答を得た（有効回答率 98.4%）。対象は体育系大学生 555 名（男性 406 名、女性 149 名）であった。平均年齢は 18.63 歳（SD = 0.82）であり、主として 1・2 年生を中心とする集団であった。なお、対象者は全員が中学または高校において運動部活動の経験を有していた。回答は無記名で収集し、個人を特定できる情報は取得していない。調査実施にあたり、研究目的およびデータの利用目的、任意参加であることを事前に説明し、回答の送信をもって研究参加への同意とみなした。

2.2 調査内容

(1) 理想の運動部活動指導者像項目

理想の運動部活動指導者像を測定するために、50 項目からなる尺度を作成した。本尺度の作成にあたっては、先行研究における指導者コンピテンシーおよび理想の指導者像に関する知見を参照し、スポーツ科学を専門とする複数の研究者による協議を通じて、項目内容の妥当性および網羅性の確保を図った。特に、人格的側面、統制的側面、教育的役割、集団形成、競技専門性といった複数の観点をバランスよく包含するよう配慮した。各項目は 4 件法（1 = 重要でない～4 = 非常に重要である）で回答を求めた。

(2) 勝利観項目

勝利観を測定するために、競技成果の追求をどの程度重視するかを問う単一項目を設定した。回答は4件法（1=あてはまらない～4=あてはまる）で求め、1～4点を付与した。得点水準ごとに4群に分類し、群間比較に用いた。

2.3 分析方法

解析には R (version 4.5.2) を用いた。理想の運動部活動指導者像項目について探索的因子分析を行い、抽出方法には最尤法、回転方法には Promax 回転を採用した。因子数は固有値、スクリープロットおよび解釈可能性を踏まえて決定し、因子負荷量 .40 以上を採択基準とした。各因子の内的一貫性は Cronbach の α 係数により検討した。次に、探索的因子分析で得られた構造について確認的因子分析を行った。推定方法は最尤法とし、モデル適合度は χ^2 値、CFI, TLI, RMSEA, SRMR により評価した。適合度の判断基準には Hu & Bentler (1999) を参考にした。各因子については、因子に高く負荷した項目の平均値を算出し因子得点とした。勝利観の 4 水準を独立変数として各因子得点の群間差を検討し、Welch の一元配置分散分析を実施した。多重比較には Games-Howell 法を用いた。有意水準は 5% とした。

3. 結果

3.1 因子構造の検討（探索的因子分析）

理想の運動部活動指導者像に関する 50 項目について、最尤法による探索的因子分析 (Promax 回転) を実施した。その結果、因子の解釈可能性および因子負荷構造の明瞭性を踏まえ、5 因子 36 項目が抽出された。各因子は、人間的信頼性、規律・統制志向、教育的役割、チームづくり、競技指導力と解釈された。人間的信頼性には「人間性を高める指導」や「人間的に尊敬できる」などの項目が高く負荷し、指導者の人格的側面や信頼関係に関わる内容が中心となった。規律・統制志向には「部活動中心の生活」や「暴力を伴う指導」などが高く負荷し、統制的・規範的な指導スタイルを示す項目が含まれた。教育的役割には「担任として優れる」や「学校業務を率先して担当する」などが高く負荷し、学校教育全体に関わる教育的能力を反映する因子と解釈された。チームづくりには「人柄・雰囲気が良い」や「話をよく聞く」などが高く負荷し、対人関係的・集団形成的側面を示す内容が中心であった。競技指導力には「指導実績が高い」や「データ活用指導」などが高く負荷し、競技専門性や技術的力量に関わる項目が含まれた。

また、各因子の内的一貫性を検討したところ、Cronbach の α は .714～.834 の範囲にあり、概ね十

大学生が捉える運動部活動の理想の指導者像の因子構造と勝利観との関連

表 1 理想の運動部活動指導者像に関する探索的因子分析結果

項目	M	SD	因子負荷量				
			1	2	3	4	5
F1 人間的信頼性 ($\alpha=0.786$)							
人間性を高める指導	3.77	0.46	.589	-.096	.101	.008	.092
人間的に尊敬	3.77	0.48	.576	-.094	-.132	.209	.130
チームの管理能力	3.72	0.51	.550	-.036	-.050	.252	.022
部活動外も配慮	3.49	0.64	.518	.079	.260	-.014	-.193
自身の規律・マナー	3.68	0.56	.473	.014	-.062	.085	-.031
情熱・熱意がある	3.79	0.46	.452	.014	-.162	.102	.186
話をよく聞く	3.76	0.48	.439	-.140	-.134	.602	-.058
強いリーダーシップ	3.28	0.72	.423	.296	-.041	.058	-.025
幅広い教養	3.55	0.59	.413	.019	.173	-.005	.128
F2 規律・統制志向 ($\alpha=0.714$)							
部活動中心の生活	2.76	0.86	.074	.604	-.104	-.039	.162
暴力を伴う指導	1.42	0.80	-.041	.536	-.004	-.176	-.046
厳しい叱責	2.42	0.91	.078	.533	.033	-.287	.078
精神論を強調	2.81	0.90	.216	.513	.003	-.033	.001
優れた選手を優遇	2.41	0.93	-.099	.489	-.007	-.053	-.003
部活動外は干渉しない	2.59	0.88	-.170	.474	-.008	.177	.019
実戦形式中心	2.91	0.77	-.072	.445	-.048	.279	.060
F3 教育的役割 ($\alpha=0.721$)							
担任として優れる	3.07	0.81	-.065	-.007	.795	.019	-.053
学校業務を率先	3.04	0.80	-.203	.034	.786	.069	-.035
教科指導に長ける	3.06	0.83	-.034	.049	.683	-.041	.008
進路指導に長ける	3.45	0.68	.154	-.076	.613	-.157	.097
教員連携が取れる	3.54	0.62	.054	-.242	.590	.065	.104
部活動外でも元氣	3.54	0.64	-.011	-.103	.526	.142	.148
生活指導に長ける	3.15	0.76	.192	.223	.433	-.032	-.078
F4 チームづくり ($\alpha=0.834$)							
人柄・雰囲気が良い	3.80	0.46	.129	-.228	-.026	.637	-.005
話をよく聞く	3.76	0.48	.439	-.140	-.134	.602	-.058
楽しく進める	3.56	0.64	.200	-.018	-.037	.596	-.089
部員の意見を採用	3.72	0.49	.106	-.136	-.063	.578	-.018
長時間練習をしない	3.08	0.79	-.245	.227	-.002	.463	.093
分け隔てなく接する	3.35	0.77	.003	.049	.162	.459	-.108
楽しさ重視の運営	3.09	0.80	-.023	.137	.179	.406	-.103
F5 競技指導力 ($\alpha=0.768$)							
指導実績が高い	3.57	0.60	.040	.189	-.232	.057	.639
データ活用指導	3.50	0.60	-.106	-.098	.311	-.075	.637
新しい知識・技術	3.73	0.47	.294	-.026	-.069	-.063	.616
データ分析評価	3.62	0.52	-.005	-.133	.277	.000	.533
指導年数が長い	3.26	0.78	-.059	.197	.193	-.174	.465
競技継続を意識	3.43	0.69	.070	.174	.196	-.072	.404

注. 得点範囲は1~4であり、高得点ほど重要度が高いことを示す。

太字は主負荷（最大絶対値かつ .40 以上）を示す。

抽出法は最尤法、回転法は Promax 回転である。

分な信頼性が確認された。因子負荷量, 平均値 (M), 標準偏差 (SD) および α 係数は表 1 に示す。

3.2 因子間相関

Promax 回転による因子間相関 (Φ 行列) を算出した (表 2)。因子間相関は .172~.582 の範囲にあり, 最も高い相関は規律・統制志向とチームづくりの間に認められた ($\phi = .582$)。人間的信頼性は規律・統制志向 ($\phi = .513$)、教育的役割 ($\phi = .483$)、チームづくり ($\phi = .504$) と中程度の相関を示した。一方, 競技指導力は他因子との関連が比較的低い傾向にあった。

表 2 因子間相関 (Φ)

因子	F1	F2	F3	F4	F5
F1 人間的信頼性	1				
F2 規律・統制志向	.513	1			
F3 教育的役割	.483	.433	1		
F4 チームづくり	.504	.582	.465	1	
F5 競技指導力	.408	.172	.178	.209	1

注. 数値は Promax 回転による因子間相関を示す。対角線下のみを記載した。

3.3 確認的因子分析

探索的因子分析で得られた 5 因子構造の妥当性を検討するため, 最尤法による確認的因子分析を実施した。その結果, モデル適合度は $\chi^2(550) = 1664.65, p < .001, CFI = .813, TLI = .798, RMSEA = .060$ (90% CI [.057, .064]), SRMR = .074 であった (表 3)。RMSEA および SRMR は許容範囲内の値を示した一方で, CFI および TLI は理想的な基準には達しておらず, 本モデルの適合度は十分とはいえない側面も認められた。したがって, 本研究で得られた因子構造は一定の妥当性を有するものの, 項目構成やモデルの精緻化については今後さらなる検討の余地があると考えられる。

表 3 確認的因子分析におけるモデル適合度

χ^2	df	p	CFI	TLI	RMSEA	RMSEA90% 信頼区間	SRMR
1664.65	550	< .001	.813	.798	.060	[.057, .064]	.074

注. 推定法は最尤法を用いた。

3.4 勝利観との関連

理想の運動部活動指導者像の各因子得点について、勝利観の水準による差を検討するため Welch の一元配置分散分析を実施した。その結果、規律・統制志向 ($F(3, 108.49) = 28.30, p < .001$)、チームづくり ($F(3, 106.63) = 6.72, p < .001$)、教育的役割 ($F(3, 107.49) = 4.86, p = .003$) において有意差が認められた。一方、人間的信頼性 ($F(3, 106.34) = 1.89, p = .136$) および競技指導力 ($F(3, 108.35) = 0.41, p = .750$) では有意差は認められなかった。なお、本研究では複数の因子について個別に群間比較を行っているため、検定回数の増加に伴う第一種の過誤の可能性について留意する必要がある。さらに、多重比較の結果、規律・統制志向因子においては、勝利観の高い群は低い群と比較して有意に高い得点を示した。一方で、チームづくりおよび教育的役割においては、一部の群間において有意差が認められたものの、規律・統制志向ほど一貫した差は確認されなかった。特に規律・統制志向因子は最も大きな群間差を示し、勝利志向の高い群ほど得点が高い傾向が確認された (表 4)。

表 4 勝利観の水準による各因子得点の差

	因子	F	df1	df2	p
F1	人間的信頼性	1.89	3	106.34	.136
F2	規律・統制志向	28.30	3	108.49	< .001
F3	教育的役割	4.86	3	107.49	.003
F4	チームづくり	6.72	3	106.63	< .001
F5	競技指導力	0.41	3	108.35	.750

注. Welch の一元配置分散分析を実施した。
 多重比較には Games-Howell 法を用いた。
 規律・統制志向は勝利志向の高い群で有意に高い値を示した ($p < .05$)。

4. 考 察

本研究は、大学生が捉える理想の運動部活動指導者像の構造を明らかにするとともに、その構造と勝利観との関連を検討することを目的とした。その結果、理想の運動部活動指導者像は「人間的信頼性」「規律・統制志向」「教育的役割」「チームづくり」「競技指導力」の 5 因子から構成されることが示された。また、確認的因子分析の結果、RMSEA および SRMR は許容範囲内の値を示した一方で、CFI および TLI は十分に高い値には至らなかった。このことから、本研究で得られた因子構造は一定の適合を示すものの、モデル適合度としては十分とは言い難く、尺度構造のさらなる検討が必要であると考えられる。

4.1 因子構造の解釈

まず構造的側面からみると、人格的信頼や対人関係性に関わる因子（人間的信頼性・チームづくり）が安定して抽出された点は重要である。部活動が学校教育の一環として位置づけられていることを踏まえると（文部科学省，2017）、競技成績のみならず、生徒との関係性や人間的側面が理想像の中心を占めることは妥当であると考えられる。また、スポーツ指導者は競技技能の指導だけでなく、スポーツの価値を伝え選手の成長を支援する役割を担う存在とされており（日本スポーツ協会，2019）、本研究の結果はこうした指導者像と整合的である。とりわけ、人間的信頼性が指導者個人への尊敬や信頼といった人格的側面を基盤とするのに対し、チームづくりは対話や雰囲気づくりを通じて集団のまとまりを形成する側面を示す因子と解釈できる。このことは、大学生が指導者の人格的資質と集団形成能力を区別しつつも、相互に関連する要素として捉えている可能性を示している。

一方、本研究では因子間に中程度の相関が認められたことから、理想の運動部活動指導者像は相互に関連する複数の側面から構成される概念である可能性が示唆された。しかし、競技指導力は他因子との相関が比較的lowく、独立性の高い因子として抽出された。すなわち、大学生は競技専門性を重要視しつつも、それを人格的信頼や教育的力量と同一のものとして認識しているわけではない可能性が示唆される。

また、本研究では規律・統制志向とチームづくりの間に比較的高い相関が認められた。このことは、大学生がチームをまとめることと一定の規律を維持することを、対立的なものというよりも相補的なものとして認識している可能性を示している。ただし、この関連が直ちに統制的指導を正当化するものではなく、集団運営における秩序形成として理解されている可能性も考えられる。

さらに、教育的役割が独立した因子として抽出されたことは、部活動が「教育としての部活」と「競技としての部活」という二重構造を有するとの議論（青柳ほか，2019）と理論的に接続する結果である。特に本研究では、教育的役割因子に「担任として優れる」「学校業務を率先して担当する」といった学校教育全体に関わる役割を示す項目が含まれていた。このことは、大学生が運動部活動指導者を単なる競技指導者としてではなく、学校組織の一員として教育的責任を担う存在として認識している可能性を示している。すなわち、本研究の結果は、運動部活動指導者が競技的役割と教育的役割の双方を担う存在として認識されている可能性を示している。このことは、部活動指導の在り方を競技論のみで捉えるのではなく、学校教育全体の文脈の中で再検討する必要性を裏づけるものである。

なお、本研究において「規律・統制志向」が抽出されたことは、その是非や妥当性を肯定するものではなく、大学生が理想の運動部活動指導者像を構成する一要素として認識していることを示すものと解釈できる。すなわち、本研究は規律的指導を推奨するものではなく、学生の認識構造の中にそのような

側面が含まれている可能性を示した結果といえる。さらに、各項目の平均値をみると、特に「暴力を伴う指導」は低い値を示しており、統制的指導を全面的に支持しているわけではないことも示唆される。近年の研究においても、大学生プレイヤーの体罰容認的態度は減少しており、体罰を否定的に捉える傾向が強まっていることが報告されている（池田ほか，2025）。これらの結果を踏まえると、運動部活動における規律は暴力的・威圧的指導とは区別された形で認識されている可能性が示唆される。さらに、運動部活動における規律や統制の在り方については教育的意義との関係から議論が重ねられてきており（青柳ほか，2019；神谷，2015）、現場においてもその教育的意義や目的を踏まえた指導の在り方を検討する必要があると考えられる。

4.2 勝利観との関連

勝利観との関連では、規律・統制志向因子に最も大きな群間差が認められ、勝利志向の高い群ほど規律を重視する傾向が確認された。この結果は、勝利の追求が統制的・規範的な指導スタイルと結びつきやすいことを示している。スポーツにおける勝敗の価値づけについては、勝利至上主義・過程重視・両者の両立といった複数の立場が議論されてきており（青柳ほか，2019）、競技スポーツの文脈では勝利追求が重要な規範として作用することが指摘されている。こうした議論を踏まえると、本研究の結果は、勝利志向の違いが規律や統制を重視する指導観の形成に一定の影響を及ぼしている可能性を示唆するものと考えられる。また、本研究ではチームづくりおよび教育的役割においても勝利観による有意差が認められた。このことは、勝利志向の違いが統制的指導観のみならず、集団形成や教育的役割の重視の仕方にも一定の影響を及ぼしている可能性を示している。ただし、群間差の大きさは規律・統制志向ほど顕著ではなく、勝利観との関連は主として規律や統制の側面に強く表れると考えられる。一方で、人間的信頼性および競技指導力は勝利観による差が認められなかった。すなわち、勝利志向の強弱にかかわらず、人格的信頼性や専門性は共通して理想とされていることが明らかとなった。本研究の結果は、理想の運動部活動指導者に求められる力量像を構造的に整理する視座を提示するものといえる。

4.3 実践的示唆

以上の結果を踏まえると、本研究は運動部活動の実践現場に対していくつかの示唆を与える。第一に、人間的信頼性およびチームづくりが安定して抽出されたことから、競技力向上のみを強調するのではなく、生徒との信頼関係や対話的關係性の構築が理想の指導者像の中心に位置していることが示唆される。第二に、勝利志向が強まるほど規律・統制志向傾向が高まる可能性が示されたことから、勝利追求と統制的指導との関係を自覚的に捉える必要がある。第三に、競技指導力は独立した因子であったことから、

専門性のみならず人格性や教育性を統合した指導実践が求められる。これらの知見は、部活動指導の在り方を再検討する上で基礎的資料となるものである。

最後に、本研究の限界と今後の課題について述べる。本研究では大学生を対象として分析を行ったため、他の年代や競技特性において同様の構造が確認されるかについては検討の余地がある。今後は他の年代や競技特性を含めた横断的検証を行うとともに、項目の精査やモデルの再検討を通じて尺度構造のさらなる妥当性向上を図る必要がある。また、本研究では確認的因子分析において概ね許容可能な適合度が示されたものの、モデルの安定性については引き続き検討の余地がある。今後は異なる対象集団を用いた検証やモデル比較などを通じて、因子構造の再現性を検討することが求められる。さらに、本研究では勝利観を単一項目で測定したため、構成概念の多面的把握には限界がある。今後は多項目尺度を用いた精緻な測定による再検討が求められる。

5. 結 論

本研究は、大学生が捉える運動部活動の理想の指導者像の因子構造を明らかにすることを目的とし、探索的および確認的因子分析を行った。その結果、人間的信頼性、規律・統制志向、教育的役割、チームづくり、競技指導力から成る5因子構造が抽出され、一定の妥当性が確認された。また、規律・統制志向は勝利志向との関連が示され、理想の指導者像の内部に価値志向と接続する側面が存在する可能性が示唆された。以上より、大学生が捉える運動部活動指導者像は多面的な構造を有していると整理できる。本研究の知見は、部活動指導の在り方を検討するための基礎的資料となることが期待される。

参考文献

- 青柳健隆・岡部祐介 (2019). 部活動の論点「これからを考えるためのヒント」. 旬報社: 31-55.
- 平野太一・梅澤秋久 (2023). 高校野球における選手が求める監督コンピテンシーの構造. 体育学研究, 68: 517-530.
- Hu, L., & Bentler, P. M. (1999). Cutoff criteria for fit indexes in covariance structure analysis: Conventional criteria versus new alternatives. *Structural Equation Modeling: A Multidisciplinary Journal*, 6(1): 1-55.
- 池田和司・中小路徹・土屋裕睦 (2025). 大学生プレーヤーの体罰に対する認識の変化—2013年と2022年の約10年を比較した縦断的調査—. *スポーツ産業学研究*, 35(3): 263-271.
- 神谷拓 (2015). 運動部活動の教育学入門—歴史とのダイアログ. 大修館書店: 247-265.

大学生が捉える運動部活動の理想の指導者像の因子構造と勝利観との関連

文部科学省 (2013). 運動部活動における体罰根絶の徹底について (平成 25 年 1 月 17 日付 24 文科初第 1260 号通知). 文部科学省.

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1338620.htm (2025 年 12 月 12 日参照)

文部科学省 (2017). 中学校学習指導要領 (平成 29 年告示). 文部科学省.

文部科学省 (2018). 運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン. 文部科学省.

https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/shingi/013_index/toushin/_icsFiles/afieldfile/2018/03/19/1402624_1.pdf (2025 年 12 月 12 日参照)

文部科学省 (2025). 部活動改革及び地域クラブ活動の推進等に関する総合的なガイドライン. 文部科学省.

https://www.mext.go.jp/sports/content/20251222-spt_ori para-000046180_00234.pdf (2025 年 12 月 12 日参照)

直井勇人・渡邊裕也・伊藤香菜子・加瀬弘樹・伊藤雅充 (2018). 高校球児が求める指導者像. 野球科学研究, 2: 30-45.

長澤淑恵 (2017). ソフトボールにおける女子チーム指導者のコンピテンシーに関する研究. スポーツパフォーマンス研究, 9: 15-26.

新美尚行・馬場崇豪・西村知晃 (2023). 大学生アスリートが求める理想のリーダー像について: 変革型リーダーシップ理論の観点から. 九州国際大学教養研究, 29(3): 55-74.

日本スポーツ協会 (2019). Reference Book. 公益財団法人日本スポーツ協会: 22-28.

日本スポーツ協会 (2022). スポーツ指導者のための倫理ガイドライン. 日本スポーツ協会.

高松祥平・山口泰雄 (2015). 高校野球における監督のコンピテンシーに関する研究. 体育学研究, 60(2): 793-806.

高松祥平・山口泰雄 (2016). 高校野球における監督のコンピテンシーが選手の内発的動機づけに及ぼす影響. 体育学研究, 61(2): 461-473.

山田快・堀本菜美・長谷川賢典 (2022). アスリートにとって優れたコーチの特徴. スポーツ心理学研究, 49(2): 157-168.

(2026 年 3 月 26 日受付 / 2026 年 4 月 13 日受理)